

- 3) 自分が現在教えている（あるいは教える予定の）学習者を思い浮かべ、習得してほしい文法事項を1つ選び、その文法事項を、ライティングを通して指導する方法を考えてみよう。その際フィードバックの有無、フィードバックを与えた場合、どのフィードバックを与えるかを具体的に考えてみよう。振り返り、セルフレビュー、ピアレビューをさせながら指導法を考えよう。

◆ 文献案内

- ① Bitchener, J., & Ferris, D. R. (2012). *Written corrective feedback in second language acquisition and writing*. New York, NY: Routledge.
WCFの研究の大家であるJohn BitchenerとDana, R. Ferrisによって持たれた本である。WCFの理論、第二言語習得理論とライティング研究における誤りの指導の歴史、WCFの先行研究、理論と研究に基づく応用実践について具体例を豊富に提示しながら説明している。メタ言語の説明の例や個別指導の際の手順などについても紹介されている。

- ② 全国英語教育学会 (2014) 「英語教育学の今：理論と実践の統合」. 全国英語教育学会編

以下の全国英語教育学会のホームページから全文ダウンロードできる。

<http://www.jasele.jp/2015/08/04/kinen-tokubetsusushi-web/>

日本の英語教育の歴史や現状が理論と実践を紹介しながら説明されている。第5章のライティングでは、日本のライティング研究の変遷、プロセスライティング、フィードバック（特にピア・フィードバック）、理論と実践について説明されている。

- ③ 白畑知彦 (2015) 「英語指導における効果的な誤り訂正——第二言語習得研究の見地から」 大修館書店

著者が主に大学生を対象として実施した明示的指導や誤り訂正の効果検証の実験結果がまとめられて紹介され、具体的な文法事項に関する指導法も提言されている。

第6章 タスクを効果的に用いよう

キーワード

タスク, TBLT (Task-based language teaching), 英語教育

アブストラクト

「英語を楽しく学ぶ」そんなきっかけとなるタスクを用いた英語教育について本章では紹介する。タスクの定義、タスクを作る背景となった理論、タスクの効果的な導入方法を紹介し、最後に教室内でも実践できるタスクの例を挙げる。

1. はじめに

「英語を使うのは楽しい」、だから「もっと英語を使いたい」——タスクをうまく導入すると、そんな教室が生まれてくるように私は思います。「コミュニケーション中心の英語教育を」と言われるようになってしばらく経ち、近年、日本でも「タスク (task)」を用いた英語教育が行われ始めています。タスクで最も大切なことは、達成感があること、そして、現実に取りこみやすいやりとり（意見交換や、情報交換など）を行うことです。個人的には、クラス内を2チームに分けて勝敗を決めるなど、ゲーム的な要素のあるタスクを中心に、英語を教える際に取り入れてきました。アメリカの大学で留学生対象に、そして日本の大学生対象に英語を教える機会があったのですが、クラスには必ず、英語に対する苦手意識、また、必修科目としてしか認識していないために、積極的に授業には参加しない学生がいます。そんな学生たちも、タスクがはじまると、笑顔になってとても楽しそうに英語を話していたのが印象的でした。日本国内の中学校や高等学校でも、英語は楽しいものと意識させ、限られた授業時間内で意味を中心とした英語を用いる時間を最大限に増やすことによって実践的な英語力をのばすことができると考えています。本章がそのお手伝いをできれば幸いです。

2. 理論

タスクに関しては、様々な定義が過去20年ほどの間に出できてきているが(タスクを用いた外国語教育に至るまでの背景は第1章を参照)、Ellis (2003)でも述べられているように、タスクには以下の6つの条件が必要である。

- (1) 教材やアクティビティを組み合わせて、学習者の行うタスクに計画性を持たせる。しかし、常に計画通り進むわけではないので、柔軟に対応できるようにする。
- (2) インフォメーション・ギャップ (information gap) や、異なる意見を引き出す活動を用いて、意味のある英語の使用を促す。
- (3) 現実世界でもありうる言語使用を促す目的で行う。タスク特有のやりとりになることもあるが(間違い探し等)、情報交換や意見交換等、実際に行われるやりとりを行う。
- (4) タスクには読む、書く、聞く、話すなどの項目を含んでいてもいい。たとえばリスニングを行った後で活動の内容理解をスピーキングで述べさせるなど、様々な項目を組み合わせて作る。
- (5) タスク中で学習者が自ら「考える」プロセスを行う。学習者自ら何かを選んだり、整理したり、理由づけをし、学習者が自分の使いたい言葉を選択する。
- (6) 言語に直接関係しないゴール(たとえば、WH疑問文を習得するというゴールでなく、「部屋から脱出する」というテーマのタスクで最も良い脱出ストラテジーを見つけたら)を設ける。

タスクの種類としては、特定の学習項目の使用を促すものは(言語)ターゲットありの(フォーカスされた)タスク (focused task) と呼ばれている。学習者が意味のあるやりとりを外国語で行い、その中で言葉に対する「気づき (noticing)」を高めていくことが、外国語習得につながると思われる。そのため、タスク内でそのような気づきを促すとされている教師による訂正フィードバック(第4章を参照)や、学生同士のフィードバックが研究の対象(第8章を参照)とされている。

3. 研究

3.1 タスクの導入に関する研究

まず、タスクを教育現場に導入した際の学習効果、そしてその取り入れ方に関する論文を紹介する。タスクをもとにした言語教育 (Task-based Language Teaching, 以下 TBLT) の効果に関して、Gonzalez-Llorca and Nielson (2014) は、スペイン政府が制作した TBLT のプログラムと、これまで行われてきた文法中心のプログラムの効果を比較した。両者のプログラムとも、スペイン語が第一言語ではない人が政府でスペイン語を使って仕事ができるようにすることを目的として作られたものである。プログラムを評価するにあたり、学習者の会話能力の変化と学習者のプログラムに対する意見が比較された。分析の結果、文法中心のプログラムを受けた学習者より、TBLT のプログラムを受けた学習者の方が、仕事をより効率よくスペイン語でこなすことができ、さらに、仕事に直接関係していない会話力もさらに上達したことがわかった。

Douglas and Kim (2014) は、カナダの学術英語プログラム (英語圏の大学や大学院の授業に対応できるようにするためのプログラム) において TBLT を導入するにあたり、教師が TBLT をどのようにとらえているかを研究した。教師の7割近くが、TBLT の授業を授業時間の半分以上行っているとして述べ、9割近くの教師が、TBLT は学術英語のためのプログラムに適していると判断した。その理由として、プレゼンテーションやエッセイ、インタビューをベースとしたタスクを取り入れることにより、学習者が主体となる授業を行うことができ、効果的な学習の場を提供できることを挙げている。その一方で、文法中心の授業を求める学習者がいること、授業の準備に時間がかかること、そして教師間により、TBLT の理解に差があることが課題点として挙げられた。

McDonough and Chaikimongkol (2007) は、タイ国内にある大学の TBLT プログラムについて、学生と教師の評価を調査した。その結果、教師も学習者も TBLT に対して良いイメージを持ち、特に、自発的な学習を促し、実践的な英語学習につながったことを評価したことがわかった。導入当初は、明示的な文法の授業がなくなつたために、一部教師の批判もあったが、言語運用能力の大切さが理解されるにつれ、TBLT プログラム

の評価は高まったという。さらに、TBLTプログラムのための情報共有の場や、サポートが必要になったため、担当者ワークショップを開催したり、教師向けガイドを作成することにより、TBLTを成功させている。日本のように英語教育が文法中心である場合、TBLTが実践力につながることを説明し、学習者主体の学習方法に理解を深め、学校や国レベルでも導入方法を考えていく必要がある。

3.2 タスクの性質に関する研究

タスクの特徴が言語使用にどう影響するか、特にタスクの内容を複雑にしたときの影響が近年研究されている。その基盤となっている2つの仮説を紹介する。

○限界容量モデル

限界容量モデル (Limited Capacity Model) とは、Peter Skehan によって提唱された仮説である (Skehan, 2009)。この理論では、学習者が認知的情報処理に使える容量は限られていると仮定されている。つまり、タスクが高度であれば、学習者はタスクを遂行すること自体に気を取られ、自分の言語運用まで注意を向けられなくなるという仮説である。具体的には、タスクが複雑すぎる場合、学習者は文法的な正確さを求め、簡単な英語しか使わなくなる。つまり、高度な英語を用いようとすると正確さが失われるという考えである。そのため、Skehan は単純なものから複雑なタスクへ徐々に移行し、言語へ注意を向ける余裕を持たせざるべきだと提唱している。

○認知仮説

認知仮説 (Cognition Hypothesis) とは、Peter Robinson により提唱されたものである。認知仮説では、タスクを徐々に複雑にすると、学習者が次第に複雑なタスクのレベルに応じた英語を使用できると考えている (Robinson, 2005)。つまり、タスクが複雑になれば、学習者はタスクが要求する高度なレベルの言語を用い (複雑さ)、同時に、注意深く意識して言語を用いる (正確さが向上) が、スムーズには話せなくなる (流暢さが低下) と想定されている。先述の限界容量モデル同様、タスクの複雑さが学習者の言語使用に影響すると考えられているが、学習者の言語の正確さと複雑さが同時に影響されることもあると仮定されている。

3.3 タスクの複雑さ

認知仮説において、複雑さを調整するためには2つの方法がある。1つ目はタスクの要素に変化をつける方法である。たとえば、単純なタスクでは、学習者は説明された現在の状況だけを考え、特に理山づけをしたりする必要がないと仮定する。それが複雑になると、未来の状況を考えたり、自分の意見とその理山を述べる必要がある。つまり、タスクが複雑になると、学習者の負担も増える。

2つ目の方法は、タスクの条件に変化をつけて、その負担を軽減させることである。たとえば、準備時間を与えて、タスクに取り掛かりやすくなり、準備時間中にタスクで使う学習項目を導入・復習し、タスク中に使う言葉に注意させ、タスクを行いやすくすることもできる。認知仮説の方が、限界容量モデルより教室内のタスク利用に実践的な側面を多く持っているため、以降の研究の紹介では、認知仮説に基づいたものを中心に紹介する。

3.4 タスクの複雑さに関する研究

これまでの研究を総合的に考えると、「正確さ」と「流暢さ」については認知仮説に沿って示されている。その理由として、複雑なタスクでは、特定の言語項目 (例: 英語の冠詞など) に学習者が注意を促されたためだと考えられる。一方、流暢さに関しては、正確に話そうとするために、発話の速さなどに遅れが生じ、おおむね流暢さが落ちたと考えられる。タスクの複雑さは、使用言語の複雑さには影響しないという研究結果が多い。

3.5 タスク前の準備時間に関する研究

近年の研究では、タスク前の準備時間を効果的に使うことが、タスクの効果を高めることが報告されている。たとえば、Ortega (2005) は、アメリカの大学でスペイン語を学ぶ43名の学生がタスク前の準備時間をどのように活用しているか分析した。タスクは、8枚の絵を見ながら、スペイン語でそのストーリーをクイズ形式で話すと話すというものである。タスク前の、10分以内の準備時間中の会話とタスク後に行われたインタビューを分析した結果、準備時間中に、学習者は、文法や発音をいかに正確に言うか話し合ったり、話す際に必要な情報を考え合ってメモをとったり、一度自らリハーサルをしてみたりすることがわかった。また、準備時間内で用

意したメモがタスク中に使えたので、実際にスペイン語で話す際のストレスが減ったと多くの学習者が報告している。

それでは、そのようなタスク前の準備時間がタスク中の言語使用と言語習得にどう影響するのだろうか。Kim (2012) は、韓国で英語を学ぶ中学生にタスク前の準備時間に会話例（モデル）を見せることで、学習者が学習項目である疑問文に注意できるか、また、使用する疑問文に影響するか分析した。学習者は2つのグループに分けられ、第1のグループは準備時間中にモデルのビデオを見たが、第2のグループは特に指示が与えられなかった。その結果、モデルを見たグループの方が、指示のなかったグループより、タスク中により頻繁に疑問文について考え、タスク後のテストではより正確で高度な疑問文を使用した。

タスク前の準備時間の指示は、「話す」ことを中心としないタスクにも影響することが報告されている。Abrams and Byrd (in press) は、アメリカ人のドイツ語学習者に、2種類の準備アクティビティをさせ、「書く」ことが中心のタスクにどのように影響するか分析した。1つ目のグループは、ライティングの内容に比重を置いたペアワークを、2つ目のグループはライティングで使える文法事項を中心としたペアワークを行った。そして、学習者のライティングの質を比べた結果、内容を中心としたアクティビティをした学習者の方が、正確に、また幅のある語彙を用いて書き、全体に良い文を書くことができたことがわかった。またとると、タスク前の準備時間を効果的に使うことが、タスクの効果を高めることが報告されている。

4. 授業での活用

4.1 アクティビティ1 ホストファミリー探し（中学校）

【教科書】 New Horizon 2

【所要時間】 40分

【教材】 ハンドアウト2種

【教材1】 ホームステイ先を探している学生: 役へのハンドアウト

1. ホストファミリー先では、お手伝いしなければなりません。

どんなことなら自分でできるか、ペアで考えて5つ書いてみましょう。(can を用いる)

1
2 (以下略)

ホストファミリー5組に、実際にどのようなことをするよう求めているのか聞き、その内容を書いてみましょう。
(※注意: クラスの人数に応じて数を増やす。)

ホストファミリーの名前	ホストファミリーの名前	ホストファミリーの名前
条件1 ≈ 5	条件1 ≈ 5	条件1 ≈ 5

どのホストファミリーが一番相性がいいと思いますか? 合致した条件の数とホストファミリーの名前を書きましょう。
ホストファミリーの名前: _____ 合致した条件の数: _____

【教材2】 ホストファミリー役のハンドアウト

ホームステイの学生に、手伝うように言わなければならないこともあります。どんなことなら頼めるか、ペアで5つ考えてみましょう。(can, have to, must を用いる)

1 ≈ 5		
-------------	--	--

ホームステイ先を探している学生5組に、どんなことができるのかインタビューし、その項目を書いてみましょう。
(※注意: クラスの人数に応じて数を増やす。)

学生の名前	学生の名前	学生の名前
条件1 ≈ 5	条件1 ≈ 5	条件1 ≈ 5

どの学生が一番相性がいいと思いますか？合致した条件の数を書きましよう。

学生の名前： _____ 合致した条件の数： _____

【活用場面】

相性のいいホームステイ先と学生を探す。ホストファミリー役は家でもらう簡単な仕事の条件を、ホームステイ先を探している学生はステイ先のできる簡単な仕事の条件を書き、合致した条件の数に基づき、相性のいいホームステイ先を探す。

【導入】

このタスクに必要な助動詞 (can, have to, must) の意味と使い方を復習する。

【展開】

1. ホームステイをする際、どんなお手伝いを頼まれるか、全員で考える。
2. 学生のペアを作り、半分のペアをホストファミリー役、残りの半分をホストファミリーを探している学生役にする。
3. ホストファミリーは、お手伝いの事項を5つ考え、学生はホストファミリー先のできることを考え、ハンドアウトに書き入れる。
4. ホストファミリー最低5組にインタクティブをし、家での決まりごとを聞く。
5. 学生役は、自分に一番合う（合致する項目の多い）ホストファミリーを選ぶ。
6. 合致した項目がいくつあったか報告させる。
7. 一番目、そして二番目に項目が多かった学生が勝ち。

【応用】

タスクに応じたライティング
宿題で、選んだホームステイ先が一番自分に合っている理由を50ワード程度で書かせる。その際に、学んだ助動詞を用いて書くように促す。

【留意点】

フィードバック
このタスクでの中心となる項目は can, have to, must なので、それらの助動詞が意味的に正しく、また、文法的に使われているか教師は教室内を歩いて確認する。

【実際の活用例】 助動詞を使わずに決まりごとの内容だけでタスクを進めることを防ぐために、教師がフィードバックを行う。

S1 (Student) : What must I do at your house?

S2 (Host family) : Clean your room.

T : That's good. You (ここで、アイコタクトやジェスチャーを用いて、学生に文を完成させる。)

S2 : You must clean your room.

【評価方法】

クラス内でのパフォーマンスを評価する際は、英語を用いてタスクを進めているか、助動詞を用いてタスクを行っているか、また、とれだけ積極的に質問と受け答えをするかを見ながら行う。また、このタスクをテストの一部として評価する場合には、学生の発音を録音し、学生が正確に学習項目を使っているかを評価することもできる。

4.2 アクティビティ2 夏休みの予定 (中学校)

【参考教科書】 *New Horizon 3*

【時間】 40分

【教材】 パソコン・人数分の投票用紙

【活用場面】

長期休暇を利用して、アメリカ旅行をする場面を設定する。学生1人の予算は航空券、ホテル代を含めて40万円とする。3～4人のグループで、アメリカの旅行代理店のサイト (Expedia など。ただし、最近では日本語版もある) で英語版を見ようにする) や鉄道会社 (Amtrak) や、旅先の観光名所のサイトを見て、旅行の予定を立てる。最後に、学生が最も良いと思った旅行計画に投票する (もし、パソコンが使えない場合は、教師がある程度行き先を絞って、複数の旅行先の航空券、渡航先のホテルの値段、各観光地でできるアクティビティとその値段を調べ、印刷したものを教室に持参する)。

【導入】

このタスクに必要な There is (are) ... be going to + 動詞の意味と使い方を復習

【展開】

1. アメリカの有名な観光地についてプレゼンテーションを行う。
2. 学生を3～4人のグループに分け、タスクを説明する。
3. 30分程度で学生は旅行の計画を立てる。この際に、次のアクティビティの説明を行って、旅行計画の説明の準備をさせてもよい。
4. 15分間で各グループが、自分の旅行計画について他のグループにプレゼンする（授業時間が長い場合は、この間に旅行先、日程などメモをとらせてもいい）。
5. 最後に学生に最も良かったグループに投票させ、最も票数が多かったグループが勝ち。
6. 時間があれば、学生にどうしてその計画が良かったのか理由を発表させる。

【留意点】 フォードバック

このタスクではグループワークが中心なので、英語が使われているか教師は確認する。このタスクでの中心となる項目は There is ... be going to なので、それが意味的に正しく、また、文法的に使われているか教師は教室内を歩いて確認する。

【実際の活用例】

グループワーク中に起こりうることとして、有名な観光地の英語名を学生が尋ねる可能性があるため、教師がある程度の観光地名を把握しておくことスムーズに進めることができる。There is ... に関しては、be 動詞の活用注意到し、必要に応じて文法事項の説明を取り入れる。

S1 : In Broadway, there is many musicals.

T : In Broadway, there ... (ここで、アイコンタクトやジェスチャーを用いて、学生に文を完成させる。)

S2 : There are many musicals.

【評価方法】

クラス内でのパフォーマンスを評価する際は、英語を用いて準備時間を進めているか、また、どれだけ積極的に旅行計画を立てているかを見て行う。また、このタスクをテストの一部として評価する場合には、学生の発言を録音し、学生が正確に学習項目を使っているかを評価することもできる。

4. 3 アクティビティ 3 犯人の聞き取り調査 (高校)

【参考教科書】 Compass English Communication 1

【所要時間】 40分

【教材】 ハンドアウト・紙幣の代わりになるもの

【教材 1】 ハンドアウト

犯人と思われる人の資料

名前 : Mr. ...	身長 : 体重 : 年収 :	名前 : Mr. ...	身長 : 体重 : 年収 :
身長 :	体重 :	身長 :	体重 :
体重 :	年収 :	体重 :	年収 :
年収 :	外見 : (写真)	年収 :	外見 : (写真)
外見 : (写真)		外見 : (写真)	

【備考】 空欄は、前もって学生に記入させてもよいし、教師が記入してもよい。外見に関しては、形容詞を引き出せるように有名な人の写真などを使い、そのコピーを各チームに配布する。また、学生のレベルに応じて人数を増やす。

【教材 2】 紙幣

50ドル紙幣の代わりになるもの (各々のグループにつき20枚)

【活用場面】

捜査官役と犯人の知り合い役に分かれ、捜査官は犯人に関する質問を比較級、同等比較、最上級を用いて尋ねる。できるだけ少ない質問の数で犯人を見つけよう伝える。

【展開】

1. 6～8人のグループに分かれる。各グループの半分は捜査官役、残り半分は犯人の知り合い役になる。捜査官は1000ドルの資金があり、比較級、同等比較の質問に対しては50ドル、最上級の質問に対しては100ドルが質問1つごとに減る。知り合いは、捜査官の質問に答え、質問の種類に応じて50ドルもしくは100ドルもらえることを伝える。
2. 5分ほど準備時間をとり、捜査官は質問の方法を考え、犯人の知り合いはできるだけ特定されにくい人を犯人に選ぶ。
3. 捜査官は、犯人の知り合いに身長、体重、年収、外見に関する質問をする。質問をする際には、必ず比較級、同等比較か最上級を用いる。

また、質問の種類は Yes/No 質問に限定する。(例: Is the person taller than Mr. ...?) 犯人の知り合いは、答えを Yes/No だけでなく、文で答える。もし、指定した犯人を比較級、同等比較で聞かれたときは、Yes で回答できる。

4. 犯人が特定された時点、もしくははお金がなくなつた時点で終了。捜査官の残金をメモし、チームを交代する。より残金の多いチームの方が勝ち。

【留意点】 フィードバック

このタスクでの中心となる項目は比較級、最上級、同等比較なので、それが意味的に正しく、また、文法的に使われているか教師は教室内を歩いて確認する。

【実際の活用例】

答えが Yes や No だけで終了しないように、単語だけの答えでなく、文を用いた答えを引き出す。

S1: Is the person taller than X?

S2: Yes.

T: Yes, He is ... (ここで、アイコンタクトやジェスチャーを用いて、学生に文を完成させる。)

S2: He is taller than X.

【評価方法】

クラス内でのパフォーマンスを評価する時は、タスクのターゲットである比較級・最上級・同等比較をどれだけ積極的に用いているか、どれだけ積極的に質問と受け答えをするか、そして、準備時間中にタスクに取り組む姿勢を見て評価を行う。また、このタスクをテストの一部として評価する場合には、学生の発音を録音し、学生が正確に学習項目を使っているかを評価することもできる。

【応用】 ライティングの宿題

準備時間中に、どのようにして少ない数の質問で犯人を見つけるか各チームで相談している。どのようなストラテジーを用いたか、100語程度の英文で書かせる。

5. おわりに

コミュニケーション重視の英語教育を目指そうという動きはあるものの、実際に何をどのように取り入れればよいかという点では、明確になっていない点も多くある。とりあえず、ネイティブスピーカーに指導させる学校が多いのはそのためだろう。しかし、大切なことは、日々の英語教育で行われていることを再確認することである。タスクを用いることにより、明示的な知識を構築しつつも、意味を中心とした英語のやりとりを楽しく行い、コミュニケーション能力の向上につながると思われ。

しかし、実際に導入していく際に、ある程度の努力は必要である。たとえば、高校入試、大学入試が英語学習のゴールという学生の場合、タスクを用いた英語教育がなぜ大切なのか理解させるのに時間がかかるだろう。その場合には、英語運用能力を重視した入学試験を用いる大学が増えていることなどを伝える必要がある。また、既存の中間・学期末テストが、文法・英訳・和訳を中心なら、テストにもタスクを用いてコミュニケーション力を測定するなど、改善する必要がある。そして、まだ日本には TBLT をとり入れた英語の教科書が存在していない。既存の教科書の内容を発展させてタスクを作るなど準備に時間がかかるかもしれない。その時間を短縮するために、クラウドサービス等を利用して、教師間、学校間、教科書ごとに、タスクを自由に閲覧できるシステムが役立つだろう。

国外の研究で、TBLT のプログラムにおいてコミュニケーション力が飛躍的に伸びたこと、学習者と教師に評価されたことを考えると、国内でも積極的に取り入れる価値はある。草の根的に教室内から用い始めることにより、教育機関レベル、また、行政レベルにも将来的に影響を及ぼすことができるだろう。

◆ ティスカッション・クエスション

- 1) 現在、学校で使っている教科書の内容や文法事項をもとに、どのようなタスクを作成できるか、「理論」で紹介したタスクの条件に関連づけて考えてみよう。
- 2) そのタスクを行うにつれて、どのような準備時間の使い方を指示するとさらにタスクは効果的になるだろうか。

- 3) タスクを用いた授業に対して評価方法はどのようなものだろうか？
 実際にテストでもタスクを用いると想定した場合、どのようなタスクを用いることができるか、採点方法はどうかすればいいだろうか。
- 4) 日本の学校のように共通の第一言語がある場合、学習者たちは英語でできる部分も日本語で行う可能性はある。英語使用を促進するためにどうすればいいだろうか。

● 文献案内

- ① 松村昌紀 (2012) 「タスクを活用した英語授業のデザイン」東京：大修館書店

日本でタスクを用いて英語授業を行うために、タスクをより効果的に取り入れるための「フォーカス・オン・フォーラム」の概念や、訂正フィードバックなどが紹介されている。最終章では英語教育現場で実践するための具体的な方法も書かれている。理論と実践の橋渡しをしているため、これから英語教員を目指す方や、現在中学・高校の英語教員におすすめする。

- ② 横山吉樹・大塚謙二 (2013) 「英語教師のためのフォーカス・オン・フォーラム入門 成功するタスク&帯活動アイデア (目指せ！英語授業の達人)」東京：明治図書

本書では簡単に理論に触れたのち、日本の中学校や高校で取り入れることのできる数多くのタスクが紹介されている。特に、日本の教育環境に合った内容となっているため、すぐに実践につながる1冊である。中学・高校の英語教育現場でタスクを授業に取り入れたい方におすすめする。

- ③ Ellis, R. (2003). *Task-Based Language Learning and Teaching*. Oxford: Oxford University Press

TBLTの利用を強く提唱してきたRod Ellis氏によるTBLTの概論書である。インタラクティブな解説などタスクの基礎となる理論を紹介し、タスクの要素を変化させて学生のレベルに合わせる方法や、学習項目があるシラバスの中でタスクを取り入れる方法についても書かれている。最後に、授業の仕方や評価方法なども書かれている。実践だけでなく、理論的な部分にも深く触れているので、大学院生や、英語教員におすすめする。

第7章

ペア・グループワークの潜在力を引き出そう

キーワード

学習者間インタラクティブ、フィードバック、社会的関係、

社会心理学

アブストラクト

学習者間のインタラクティブは、教師とのインタラクティブといくつかの点で異なる。特に生徒が共に構築する社会的関係は、インタラクティブにおける様々な学習機会に大きな影響を及ぼす。よって、タスク前およびタスク中に、学習者間のインタラクティブの効果を引き上げる指導をすることが教師の大切な役割となる。

1. はじめに

多くの教師は、生徒同士で行うアクティビティの効果に懐疑的です。よくある懸念事項として、学習者の自主性が挙げられます。生徒が英語でコミュニケーションをとるだろうか、与えられた課題を自分たちだけで完了できるだろうか、などの心配の声はよく聞かれます。また、お互いから誤った文法や単語を学ばないだろうか、お互いにフィードバックを与えるのは不可能ではないか、などのインタラクティブの質に関した心配事項も挙げられます。このような懸念には、2つの背景が考えられます。1つ目は、教師が用いたアクティビティ自体に何らかの問題があった。2つ目は、教師がアクティビティを用いた際、アクティビティの前またはアクティビティ中に学習者間インタラクティブの隠れた効果を引き上げる指導を行わなかった、などです。しかし、ペア・グループワークを有効に使用することは第二言語教育において非常に大切なことです。なぜなら、ペア・グループワークこそが、意味のあるインタラクティブの機会を作り出すからです。特に、日本のような外国語学習の環境においては、教室外でのインタクトがない、学習者の第一言語で指導する（日本語で英語を教え